

繁殖障害によく使われている ホルモン剤の話 その2

前回の「繁殖部会から」では、hCGとコンセについてお話しました。今回は、「PG」と言われているホルモン剤(プロスタグランジンF2 α)についてお話したいと思います。

「PG」は、牛の子宮から分泌されます。黄体を小さくして、消してしまう作用があります。

農家さん「獣医さん。この牛、前みてもらった時、卵巣が動いてないと言われたんだけど」

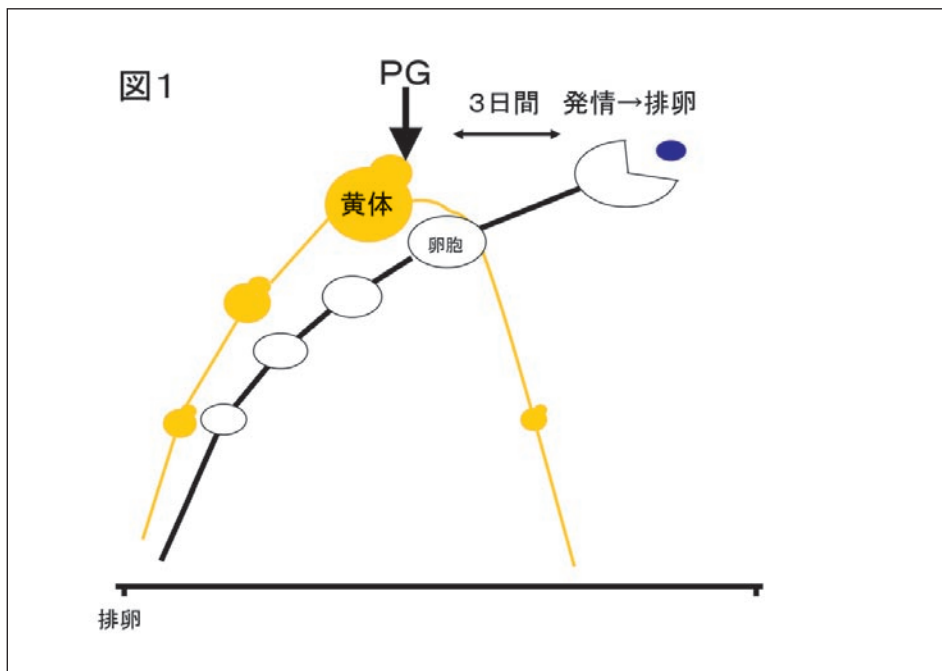
獣医師「黄体があるよ。発情よんでみるかい?」

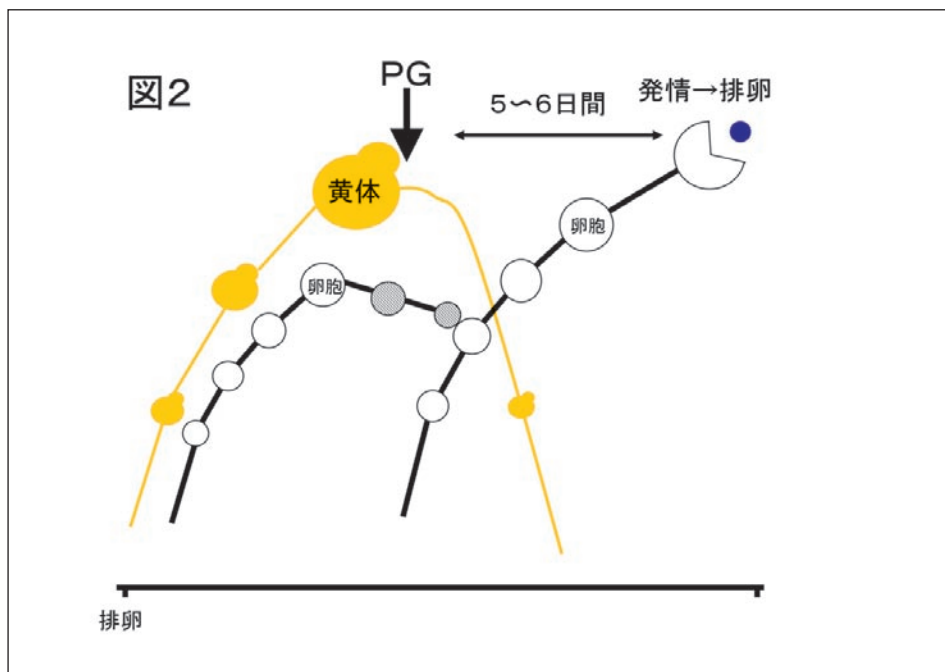
農家さん「そうしてもらおうかな」

獣医師「じゃあ、PG打つね」

農家さん「いつ、人工授精師さん呼べばいい?」

獣医師とこのような話をしたことがある方は多いと思います。3日後に人工授精師に依頼するのが一般的です。しかし、人工できなかつたり、まだ早いと言われたり、または、6日後に発情があったりして、迷ってしまったことがあると思います。なぜ、このようなことが起こるのでしょうか?





まず、乳牛は発情周期中に時期をずらして2〜3個の卵胞が育ち、最後の卵胞だけが排卵します。この、特別な卵胞の発育が「PG」を打ったときの発情時期のずれを引き起こします。

図1のように黄体と排卵可能な卵胞のタイミングが良ければ、

3日後に発情があると思います。

図2のように排卵可能な卵胞がなく、次に発育してくる卵胞が発情と排卵を起こすような時は、時間が掛かり、5〜6日後に発情がくる可能性があります。

獣医師が直腸検査で約2〜3センチの黄体を確認できれば、「PG」を打って発情を起こすことが可能だと判断すると思いますが、大きさのみで図1と図2の黄体の違いを判断することは非常に難しいと思います（筆者には自信がありません）。

「PG」を打った後、3日後に発情がこなかったから、人工授精してもダメだということはないので、1週間ぐらいは発情に注意して、発情の兆候があれば人工授精をしてください。

自然に発情がくるのが、最も望ましいのですが、発情兆候がはっきりしなかったり、空胎が長いようであれば、「PG」を打って、人工授精の機会を増やしてあげることも必要だと思います。そして、せっかく「PG」を打ったのだからその後、1週間は発情に注意して、人工授精のチャンス逃さないようにしましょう。

（鶴居支所家畜診療課 石川行一）